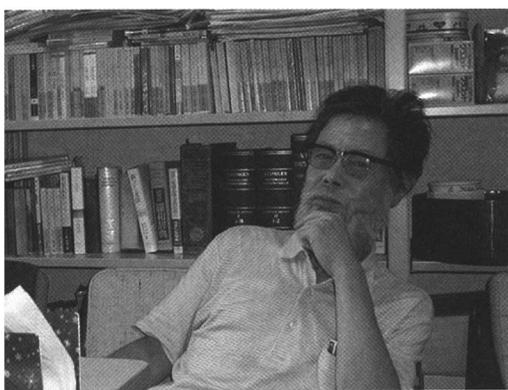


神の前における謙遜の営みについて

Doch bewegt sich die Erde — それでも地球は回っている —

土岐健治インタビュー

聞き手：古澤ゆう子／松永正義／武村知子



旧・新約聖書中間期のユダヤ・アイデンティティの研究。ディアスポラとユニヴァーサルリズム

武村 土岐さんは言社研第一部門専任スタッフの中で唯一、国際研究館に研究室をお持ちでない、したがって普段あまりお姿を見ることができないのですが、今日は念願かなってその土岐さんにお話を伺えるたいへん嬉しい日です。本当はこちらから西キャンパスへ出かけていって、伝説のお

部屋を拝見したかったんですが、それはお嫌であるということ（笑）。言い伝えでは、言社研ができてスタッフがみな国際研究館に引越してきたときに、土岐さんはもう本が収集がつかなくて引越などとて不可能とおっしゃられて、もとの研究棟にそのまま残られたとか。お部屋、どんなことになってるんですか？

土岐 もう大混乱、ゴミ箱状態です（笑）。古澤 二十年前からたーくさん持っておられましたよね。単純に考えても三分野ぶん

の本があるわけですよ、ヘブライ関係、ヘレニズム関係、そしてキリスト教関係、それもある特定の時代じゃなくて現代まで。

古代の研究する人はよく、その時代より前のことを知ってればよくて後の時代のごとは自分の首尾範囲ではないと考えてしまうんですけれども、土岐さんは現在のイスラエル共和国の状態に至るまで、ずっと押えておられる。旧約聖書を専門に研究していらっしゃる人はずいぶんいるし、新約聖書はまた特に多いと思うんですけど、両方のせめぎあいの中間期といえますかね、それを研究領域に選ばれた動機をまじうかがいたいな。世界でもそうだと思うんですけど日本でもほんとに少ないんですよ、中間期の研究をきちんとなさってるかた。

土岐 東京神学大学の四年生のときに、旧約聖書偽典の『第四マカベア書』を読んだんですよギリシャ語でね、それから同時にICUでプラトンのシュンポシオン、『饗宴』を読んで、一緒に読みくらべてみると、非常に類似点が多いんですよ。一方はヘブライズムで一方はヘレニズムですけど、類似点が多いんですね。それでこの時

代のユダヤ教文献を研究してみようという気持ちが強くなったんです。

古澤 マカベア書はもともとギリシア語で書かれたんですよ。あの時期にギリシア語で発信したということは面白いことですね。

土岐 ギリシア文化、とくにプラトンとストア主義を研究摂取して、ユダヤ的な特徴っていうものをギリシア思想によって基礎づけるというんでしょうかね、自分の信仰的立場を基礎づけ、説明する。マカベア書の著者は、そういう作業をしてるわけです。古澤 ヘブライズムの歴史というのは、ある意味でメソポタミアの多神教とか、大地母神的な女神信仰に対する闘いの歴史だったわけなのに、その時点でユダヤ思想の側からギリシア的なものを受け入れるとか歩み寄るといえるのは興味深いことですね。プラトン哲学あたりになると、根は多神教でも、イデア、理念というか超越的なものに収斂される場所があって、そのあたりでマカベア書の作者も自分に響きあうものを感じたんでしょうか。マカベア書は第四

土岐 第一マカベア書はヘブライ語の原典からギリシア語に訳されたもので、第二マカベア書は原典そのものがギリシア語なんです。第一はマカベア・ハスモン王朝を基本的に支持・肯定する、ないしその立場を弁護する立場で書かれてるんですが、第二マカベア書は逆にハスモン家に対して批判的です。これに対して、第三はアトレマイオス王朝によるユダヤ人迫害への対抗の書で、第四も同じようにシリアのセレウコス王朝に対する反抗の書、どちらも原典はギリシア語で書かれています。

古澤 そうすると第二マカベア書はいつてみればユダヤ教内部へ向けての批判の書で、第三・第四はむしろ外部への批判の書ということになるかと思うんですが、そのどれもがギリシア語で書かれたというのは、ヘブライもしくはユダヤ民族以外の者に対してもその批判を発信しなくてはということだったわけですよ。古代ユダヤ民族が一番栄えたのはやっぱりダビデ・ソロモンの時代なんですよ、そのあとはいづも周囲の強力民族の間でほそぼそと生き延びてきたという印象があるんですけども、マカ

ペア書が書かれた時代はどういう状況だったんでしょか。

土岐 だいたい紀元前二世紀ごろ、ヘレニズムの波がユダヤに強く押し寄せた時代です。この波は紀元前四世紀ごろからはじまるわけですけども、二世紀は特にその波の勢いが強かった時代で、その波と対話しながら、自分の民族の固有性というものをいかに打ち立てるかっていうことを、マカベア書の著者たちは模索したわけです。

古澤 ギリシャ文化ないし強力なローマ国家に圧迫されて、このままではユダヤ民族も文化も滅びていく、迫害されてそのまま地上から消えさっていくという危機感があったと思うんですけど、あのメソポタミアからパルステイナにかけての地域では古代からほんとにいろいろな民族が興っては滅び興っては滅び、あのくらいの規模の小民族で、絶滅してしまった民族はたくさんあるのに、なぜイスラエル民族はずっと続いてきたか、その強さはどこに由来するんでしょうね。

土岐 そうですねえ、やっぱりヤハウェー神教の力といえますかね、あるいはまあ、

アブラハム以来の父祖というんでしょか、族長、ペイトリアルクたちの信仰、モーセの信仰を受け継いで、それを自分たちの時代に生かすという気持ちで常に持ちつづけたいということじゃないでしょうかね。

古澤 神によって約束されたから、ということでしょうか？

土岐 契約ということが重要な意味をもってきますね、契約に対する信仰心です。しかも古い時代からイスラエルの信仰の伝統の中には非常にユニヴァーサルな面が強くあるわけです。アダムとエヴァの話もひとつの契約といえると思うんですけど、人類全体に対する契約ですね、あるいはノアの契約も人類全体に対する契約ですね。アブラハムの契約においては、アブラハムを神が祝福する、それからアブラハムが全世界のために祝福するという、そういう約束が語られている。つまりイスラエル民族は、自分たちが祝福を受けるだけじゃなくて、全世界の全民族を祝福するという使命を、神との契約の名のもとに自分たちが負っている、そういう考え方を抱きつづけたわけです。

古澤 ある意味で自分たちが滅びれば全人類も滅びるといふ考え方ですね。そしてまた例えばアベルとカインの話で、カインが殺されずに印をつけられて生きのびて子孫も増えるという考え方、つまり、罪を犯してもそのまま抹消されるのではなくて、罪を負いながら生き続ける、その保証といったらおかしいんですけど、そういうのもイスラエルの信仰の中に入っているのかな。最初は神殿という、象徴的な心のよりどころであると同時に、実際の宗教的な中心地があったわけですが、それがなくなって初めて、ほんとにユダヤ教というものが成立したといえるでしょうか。

土岐 ユダヤ教の成立は紀元前六世紀のパピロン捕囚の時代にはじまるわけですけども、紀元後七〇年に神殿がローマ軍によって破壊されたあと、口伝——書かれた律法 written law に対して oral law の集大成が紀元後三世紀に『ミシュナ』によって固められ、それがその後のユダヤ教の基礎となります。

古澤 基礎ができると同時に、でもそれで安泰どころか逆にだんだん信者たちも迫害

されたりして減って散らばってしまいうわけですよ。それをどっかで集中させる力を持ち続けた、それが不思議でしょうがないんです。

土岐 そもそもアブラハムがカルデアのウルからカナンへと放浪するわけですね、その放浪、ディアスポラというのが、イスラエル民族のひとつの中心的な考え方として確立してきます、自分たちはディアスポラなんだっていうことがね。みずからを本来的なディアスポラ存在であるとみなす、それがユダヤ民族を現代まで生き続けさせた大きな要因だと思いますね。

古澤 出身地、民族の発祥の地はあまり重要じゃないんですね、ただし「約束された地」カナンは重要で、それをディアスポラのユダヤ人たちはいつも思いつづけている。武村 カナンという名で表象される「約束の地」が、終末論の構造を呼びこむ、という話をご本のあちこちに出ていますね。民族が生きのびる上で、終末論的なもの果たした役割がとても大きいということですが。

土岐 それは非常に大きいですね。特に黙

示文学とよばれる一群の文献があるわけですが、旧約聖書の内部でいえばダニエル書ですね、イザヤ書やエゼキエル書の中にもありますけれども、終末論的な考え方というものがユダヤ民族の生命力といましようかね、生き続ける力として大きな役割を果たしたと思いますね。

古澤 黙示文学、それから終末論というのは、イスラエル民族にとっても本来ちょっと異端的な要素があると思うんですよ。旧約の中には死後の世界に関する記述はぜんぜんないし、終末論的なものはみんな偽



古澤ゆう子

典や外典ですよ、正典Ⅱカノンの中には入っていない。

土岐 パピロン捕囚とか、セレウコス王朝による迫害とか、プトレマイオス王朝による支配とか、そういうものに直面した人々が自分自身の信仰つてももの原点を考えるときに、ひとつはユニヴァーサルスティックな方向がありますが、もうひとつは、終末というものによって現状を解釈する。この世界が根源的な悪の世界であるという認識が黙示思想の根底にはあるわけですが、さまざまな異民族によってユダヤ人が迫害されているという状況に直面して、終末論とか黙示思想というのが、生き延びるためのエネルギー源になったと思うんですね、それが、たとえばクムラン写本には典型的にあらわれているし、時代の年代的にもそれに近い洗礼者ヨハネとかイエスがそれを受け継いでいく。そこに、ユダヤ教からキリスト教への橋渡しがあるわけで、だからキリスト教というのははっきりいえばユダヤ教の異端ですね。

古澤 この世は悪であるということから、一方ではクムラン教団にせよ、アレクサン

「ドリアのフィロン」のいう「観想的生活」にせよ、ちょっと世間から、悪の世界から離れてどこかにひとつの場所をつくる、純粋性を保つもしくは善を考える場所というものをづくりあげてそこで隠遁というか、そこをよりどころとするという方向性も持っていますね。

土岐 ひとつの重要な要素として荒野というのがあります、沃地に対する荒野ですね。沃地は農耕文化で荒野は放牧。カインとアベルの物語にしても、アベルが牧畜でカインが農耕で、農耕民族が牧畜民族を圧倒するっていいでしょうか、そういう背景があるの物語の中にあらわれていますね。

古澤 それ大きいですね、例えばアブラハムが甥のロトと別れようというときに、ロトのほうは沃地、平地を選ぶ。アブラハムは生活は厳しそうですけれど瘦せた地、荒地のほうへ行って。

土岐 そう、それで結局アブラハムのほうがヤハウェとのつながりを維持する。パベルの塔の物語も同じですね。沃地に定住しようとする人々に対して神がそれを否定するわけです。もともとあの話はパベルの

「塔」の話じゃなくて、パベルという土地に、沃地に定住しようとする人間の欲望ですね、それに対して神が否定するっていうのがパベルの物語です。

古澤 みんなで一緒になって定住農耕、そして塔つまり家をつくろうとしたわけですよ、石の家をね、だけどそれをよしとしないヤハウェが「散らばした」。

土岐 そう、散らばした。ディアスポラの原点となるわけです。セプテュアギンタ、いわゆるギリシア語七十人訳聖書では、ここでディアスベイレインという言葉が出てくる、同じことはアブラハムのカナンへの放浪についてもいえることで、カルデアのウルは沃地定住の象徴ですね、そこからディアスポラとしてカナンへと放浪していく、荒野へ出ていくという。クムラン教団も荒野で生活をする、洗礼者ヨハネも荒野で説教をする、それからイエス・キリストも荒野で最初の四十日間の悪魔の誘惑を受ける。荒野というのはユダヤ民族にとって非常に重要な意味を持って、ディアスポラということ関わっています。

武村 ディアスベイレインという語が最初

に使われたのは――

土岐 たぶんセプテュアギンタですね。紀元前三世紀から紀元後一世紀にかけて。ちょうどそういう、ギリシヤ人に囲まれた中で自分たちがその土地にとってよそ者であるという、寄留意識といっちゃどうか、そういうものが根本にあったと思いますね。

現代でもイスラエル共和国以上に世界各地に散らばってディアスポラ存在になっているユダヤ人のほうが圧倒的に多いわけですが、それを支えるのはそういうメンタリティといつか精神性が根底的にあるわけです。それがキリスト教にそのまま受け継がれて、新約聖書の中でもキリスト教徒が自分たちのことをディアスポラと呼んでるわけですね、この世界は本当の世界じゃなくて、自分たちはこの世では寄留者であり、ほんとの世界というのは死後に神の国に入ることによって得られる、故郷は神の国にあるっていう考え方が新約聖書に認められる、それはユダヤ教のディアスポラという考え方をそのまま受け継いだ考え方です。イスラエル共和国はそういう意味では非常な矛盾をはらんだ存在で、非常に問題が多いんで、

ぼく自身は現代のイスラエル共和国という存在に対して非常に否定的なんです。ですから、ぼくはイスラエル共和国（パレスティナ）へは、一度も行ったことがありません。ぼく自身の研究にとつて、イスラエル共和国（パレスティナ）へ行くことは、ほとんど何の意味もないと考えていますし、イスラエル共和国へ行くことはイスラエル共和国の存在を容認することにつながると思えていたからです。やっぱりあの土地はパレスティナに元来住んでいた人々の土地であって、イスラエルは後発民族といましようかね、あとから侵入した民族ですからね。

武村 この世にないはずの「神の国」を地上に作ってしまったらそれは信仰の本質に照らして間違いだという？

古澤 強い戦力をもって周囲をおびやかして——

土岐 定住して、ということとは、新旧約聖書の根底に流れるディアスポラとかユニヴァーサルイズムとは根本的に矛盾するわけですか。

ユダヤ教の異端としてのキリスト教

松永 ちょっと話が戻るんですけど、沃野に住む者と荒野に住む者という対立があつてその中でディアスポラという理念が出てくるということですよ。その、今はやりのディアスポラの議論みたいなのは、いわゆる国民国家という枠組みのなかでディアスポラにならざるをえないものと、国民国家の中に安住している者と、そういう自他の対立のなかで、ディアスポラの理念によって国民国家の構造を批判しようとするわけで、そういう意味では、沃野に住む者と荒野に住む者という対立構造と重なっているのかなという気がするんだけど、一方、この世というのは本来あるべきでない世界であるという、キリスト教の中にも色濃く受け継がれているという考え方になると、それだけのことでいえばそこではもう、自他の区別というのかな、沃野に住む者と荒野に住む者という対立構造はむしろ薄れてしまつて、どこにいる者でも等しなみにそういう悪い世界にあるんだという形になつちゃいますよね。その関係が、キリスト教

とユダヤ教の関係とどう重なってくるのかな。

土岐 ユダヤ教ではいわば荒野存在というものは、一貫して聖書の中を通じて言われている面もあるけれど、一方ではやはり異端的なものという側面も拭いがたくあるわけです。そもそもユダヤ教そのものが、バビロン捕囚の中で生まれ、現在に至るユダヤ教の最も重要な文書である『バビロニア・タルムード』もバビロニアで生まれ、さらにセブチユアギンタが生み出されたのもエジプトのアレキサンドリアで、いずれもディアスポラ存在の中から生まれた、そういう意味では、パレスティナをユダヤ教の本山とするならば、ユダヤ教そのものも、その正典も、両方とも本山ではないところから生まれてるわけですね、矛盾するようですが。ディアスポラという観念は、ユダヤ教の根幹ではあつても、本来異端的な側面が強いんです。それがキリスト教では表だって主流として受け継がれてきている。ユダヤ教の中のディアスポラ思想をキリスト教がいわば大きな遺産として、主要な財産として受け継いだわけですが、それ

からまた、ギリシャ文化との対話に関して
も、キリスト教徒以前にユダヤ民族がギリ
シャ文化との対話をすでに繰り返し重ねて
いて、そういう周囲のいわば世俗的といひ
ましようかね、そういう文化との対話のし
かたっていうのもキリスト教は受け継いで、
さらにユダヤ教が本来持っていたユニヴァ
ーサルイズムも一緒に受け取ることによつて、
キリスト教が強力な世界宗教として生き延
びた、というふうな説明できるんじゃない
かと思ひますね。

武村 現代のいろんなディアスポラ論議の
なかでは、ユダヤ民族についてだけではな
くいろんな民族の離散の状態に関して、こ
の言葉を使って、一種普遍的な現象として
論じられるんだと思うんですけど、それは
どうなんですか。ディアスポラのユニヴァ
ーサル化とでもいうべき現象のひとつだと
思ひたいいんでしょうか？

土岐 ある意味では言葉の誤用という面は
ありますね。

松永 まあ国家構造みたいなものを相対化
する拠点としてのディアスポラというのは、
国家構造の中に定住化したとたんにディア

スポラでなくなつてしまふわけだから、む
しろそこから抜け出すようなありかたをど
う保証するかということが議論になつて
るわけだよね。現実の差別の問題というの
が解消されていくのはいいことだけど、解
消されていくことによつて、本来の拠点と
してのディアスポラの立場がだんだん国
民国家の構造のなかに回収されてつしま
うという側面と両方あるつていう。回収さ
せないありかたというのが思想的にどこで
保証されるのかというのが非常に問題で、
そのあたりが、古代のユダヤ民族自体のあ
りかたの問題というかユダヤ思想そのもの
と案外というか起源的にとりか、重なる
んじゃないかなというのが非常に面白いと
こだけど。例えばそういうディアスポラの
な思想と終末論的な思想が、どこでどうい
うふうにかみあつてくるんですか？

土岐 ディアスポラっていうのは、ある意
味では、本籍を離れたといひましようかね。
本籍を求める旅といひものが終末論と結び
つくんじゃないでしようかね。

武村 本籍を求める旅なんだけれど、つま
り神との契約そのものがともと矛盾をは

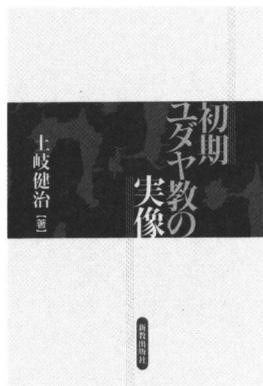
らんでる。ずっと荒野をさまよつて散らば
つてなくてはいけないといひのと、約束し
た地があるからそこへ戻らつていひのと二
つ、契約には含まれてるわけですよ。両
方を同時に守れないから、両方を守ろう
としたら、本籍へ帰還するほうはあの世で
やるしかない、それで終末論になると。十
戒では確かに、定住するなといひつてませ
んよね。でもいわゆる「モーゼ五書」です
か、それを民族の書として持ち歩いてるう
ちに、全体の中に浮かび上がつてくる契約
の本質といひのが実はそういうものだつて
ことが明瞭に関知されてきてしまつたとい
うことなんではしようか。

土岐 おっしゃる通りだと思ひますね。

武村 ユダヤ教がキリスト教へと受け継が
れて世界的な宗教になつていく過程で、ユ
ダヤ人とユダヤ教が悪者になつちやうでし
よう。それがすごいなと思ひますが、ユ
ダヤ人の側としては、その逆転をどういひ
ふうにして受け止めたんでしようか。

土岐 それは、新約聖書そのもの、例えば
ヨハネ福音書なんか特に顕著に見られる
点です。マタイ福音書もそうですけど。

バッハをはじめとしてマタイ受難曲とヨハネ受難曲ではあるんだけど、ルカ受難曲ってのは少ない。それはマタイ福音書とヨハネ福音書が反ユダヤ人的な立場を明瞭に提示してるからですね。作曲家にしてみればそこに、聴衆にアピールするものがあったんですね。新約聖書そのものの中にそういうアンチセミティズムが明瞭にあるわけです。ほくの『初期ユダヤ教の実像』の中で書いていることなんですが、初期ユダヤ教の実像というものは、一部のというかほとんどのキリスト教徒が考えているように律法主義とか行為義認主義だったわけじゃなかった。ところが新約聖書では確かにユダヤ人は律法主義者で行為義認主義者であると書かれている。でも実はそうじゃ



土岐健治『初期ユダヤ教の実像』新教出版社、2005年。

ないんだということをキリスト教徒は認識しなきゃいけない。そのあたりで、キリスト者も、キリスト教ないし聖書に対して批判的に対峙することが求められるわけです。多くの研究の動因は、ひとつはさっきから話に出てくる、ユダヤ民族の生き延びてきた力というのがありますけども、やっぱりいちばん大きい動因は、なんといっても新約聖書の背景としてのユダヤ教、もしくは旧約聖書の後期の文書の背景としてのユダヤ教というものが、聖書を照らし出す光として非常に重要だという認識ですね。古澤 マタイやヨハネは反体制反権威の人たちですから、彼らの福音書というのはある意味で、その当時のユダヤ教の中で力を持っていたパリのサイ的な律法主義とかさう

いう部分に対しての批判書であると、そういう文脈の中で理解するべきなんじゃないか。

土岐 そうですね、でも実像はつまり、そういうものが教義上それほど力を持っていたというわけでもないんです。

武村 むしろ政治的な力関係の問題だと？
土岐 そう、それを新約聖書が、教義上の争いへと変換しちゃった、それをキリスト教は受け継いでるわけです。そもそも成立期のキリスト教というものがユダヤ教と対立せざるを得なかったわけですね。もともとルーツがユダヤ教にあるわけですから、パウロなんかの伝道・宣教もユダヤのシナゴグが拠点になる、そこでユダヤ人と対決して、そのシナゴグから出ていって異邦人に伝道しにゆく、というのが使徒行伝なんかに見られるひとつのパターンなわけですね。そういう、ユダヤ人との対決というなかで、必然的にユダヤ人を悪者化せざるをえないという要素が強く働いた部分がある、新約聖書にそのまま残ってるということが出来るでしょう。その遺産を、キリスト教徒はきちんと整理して清算しないといけない

い。ところが実際それはなされていないわけです。

古澤 イエス自身がラビと対話をし、シナゴグで説教をしていたんですものね。ただしやはり、十字架、そして罪の贖い、という要素が、キリスト教の中では非常に大きい、ユダヤ教からの離反というか、それも継承なのかもしれないんですけど非常に大きな違いだと思いますが。

土岐 それもですね、例えば紀元後一世紀のユダヤ教の文献である『聖書古代誌』というのがあるんですけど、それを読むと、アブラハムが息子イサクを神から犠牲として捧げるように求められるときに、旧約では数の中に羊がみつかって代わりにそれを捧げることになってるんですけど、『聖書古代誌』の中では、アブラハムがイサクの血を流したと書かれています。その流された血によってイスラエル民族が贖われる、という考え方が明瞭にあるんですね。第二、第四マカベア書にもあります。贖罪の死という考え方も、明確にユダヤ教からキリスト教に受け継がれたものです。『ユダヤ古代誌』なんかみると、あるいは『ヨベル書』

なんて偽典もありますけれども、アブラハムがイサクを犠牲に捧げたのは過越の日であったとされている、でイエスも過越の祭の日に十字架にかけられるわけですね。そういう点は明確にユダヤ教からの遺産としてキリスト教が受け継いだ重要なポイントです。イエスがそもそも終末論的な黙示的な預言者ですね。ディアスポラのな、荒野的な存在、そういうものを我が身に引き受けるという使命感といましようか、それも旧約に由来するわけですけども、旧約あるいはクムラン宗団的な考え方を洗礼者ヨハネが受け継いでいる、それをさらにヨハネからイエスが引き継いで、黙示的預言者として神の王国の接近を説いたといましようかね。

武村 クムラン写本で「義の教師」と呼ばれているのも、そのような者ですね。洗礼者ヨハネがクムラン教団と関わりがあったというのには？

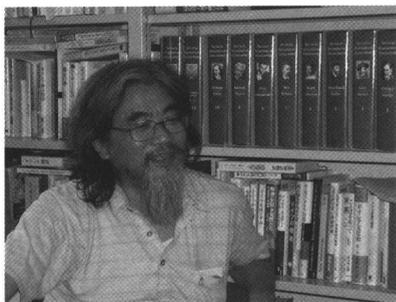
土岐 間違いないですね。荒野ということと、あと洗礼ということもありますね。クムラン教団では沐浴ということが非常に重視されています、クムランに限ったことじゃ

ないですけども、それと洗礼は密接なつながりがありますね。

古澤 洗礼はいわば、この世の穢れた悪を清める儀礼ですよな。「観想的な生活」とかクムラン教団の場合は、でもそうやって荒野に出ていっていわば自分たちだけ清い生活をしていればよかったのかもしれないけれども、イエスの場合は、ヨハネもそうかもしれません、荒野からどどってくるんですよ。そして伝導、説教を始めた。それがだいたい珍しいといつか特徴的なね。自分が一種の悟り、価値観の転換を経験して、でもそこに留まるんじゃなくて、それを、全人類というか人間への、いいことに変えてく。それでしかも、罪を購うというのもわかりにくい概念なんですけれども、それを究極的なやりかたで身をもって血を流して示すという、その衝撃が原始キリスト教の少なくとも原点にはなってるんでしょね。

武村 エレミア書のあたりでユダヤ・イスラエル思想の急に大きな転換がありますよね、ユニヴァーサルリズムの局面で。

土岐 そうですね。



松永正義

武村 「おれたちはだめだった、だから滅びる、そのかわりにみんなが助かる、だからおれたちも助かる」という。なんかそういう、民族主義なんだかユニヴァーサルズムなんだかよくわからない逆転の発想のようなのは、イエスのその博愛的な、身をもってする罪の贖いというのと同じ構造をしているように思えますが、そういう逆転の力で新約ができて、その力が非常に逆説的にイスラエル民族をも生き延びさせている、そのうねりが非常に強くうねっていた時代なんですね、新旧中間期というのは。

松永 イスラエルにつながるようなシオンイズム運動ってのは、いつごろどういうふうに始まったんですか。

土岐 一九世紀の民族主義の一形態としてですね。

松永 ああそうか、ナショナリズムのひとつの形態として。

古澤 シオンイズム運動では、この地上に国をつくらうってのは最初からあったんですかしらね。支配権、国家主体を持って。

土岐 最初は必ずしもパレスティナじゃなかったんですけどね。重要なのはシオンイズムってのは元来非宗教的なユダヤ人の運動なんですね。ですからイスラエル共和国、現在は状況が変わってるかもしれないけれど、かなり長い間、労働党が第一政党で、労働党ってのは非宗教的なユダヤ人の民主社会主義的な政党ですからね。
古澤 民族的な運動で、宗教的な運動ではなかったわけですね。

キリスト教が受け継ぐべきもの。翻訳とコンコードランス

土岐 あともひとつぼくがずっと関心を持ち続けているのは、聖書の翻訳の歴史です。

キリスト教ってものはそもそもセプテュアギンタを聖書として受け入れることによって成立してきた、そしてそのセプテュアギンタがウルガタラテン語訳聖書に受け継がれて、それから近代語に翻訳されるというかたちで、キリスト教の正典というのは受け継がれてきているわけです。例えば新共同約聖書が、ヘブライ語原典に拠っていると、いうことを謳って、章節の数などもヘブライ語原典にあわせてるわけですけども、でもキリスト教の伝統というのは、セプテュアギンタ、ウルガタ、それからそれにもとづく近代語訳という、そういう伝統の流れがあるわけですから、その伝統に対する顧慮というものがもっと正当になされるべきであって、安易に単にヘブル語原典にさかのぼればいいというもんじゃありません。その翻訳の伝統の歴史っていうものに対する視点が現代の日本のキリスト教会には欠けているというふうに思います。
古澤 ただ原典主義を唱えればいいというものではないんですね。

土岐 日本語訳聖書というのは、中国語訳聖書の翻訳として出発しています。日本人は現代中国語は知らなくても漢文として読むことができた。一八世紀にカトリックのバセというフランス人の宣教師が聖書の中国語訳をつくったのがいちばん古いといわれてますけれど、その影響を受けてロバート・モリソンなどが大英博物館でバセ訳を筆写して中国へもちこんで、そして改めて中国語訳聖書をつくった。それを、日本へ来た欧米の宣教師たちが持ってきて、日本人は漢文として聖書を読むことができると、それから欧米の宣教師は現代中国語として中国語を勉強していると、その両者が協力することによって中国語訳から日本語訳をつくるというかたちで、日本の聖書はつくられたんです。江戸末期から明治の初期にかけてですね。

武村 一六世紀から一七世紀にかけての、いわゆるキリシタン文化の時代には、『キリストにならいて』とかそういういろんな教義書や祈禱本なんかは当時の日本語に訳されたけれども、聖書は訳されてないですね。



土岐 なんででしょうね、よくわかんない(笑)。確かにその時代には聖書は日本語に訳されてませんね。

武村 当時の、『キリストにならいて』を訳した『こんてむつすむん地』というのが、一六一〇年かなんかに出たのかな、たいへんすばらしくて、朗読するための日本語としてもすばらしいんですけど、それ以前にあったのもちょっともおかしくないような誤訳が、これには一切ないんですよ。正確なんですよねすごく。びっくりしたな。

土岐 誤訳ということでしょうと例えば、有名なヨハネ伝一章の「言葉は神とともにあった」という文句がありますね。あれはほとんどすべての日本語でそういうふうに訳されてる、ところがこれはギリシャ語原典

『こんてむつすむん地
世をいとひせすきりすと
をまなひ奉るの理』、京
都、慶長15年(1610)。
トマス・ア・ケンピス
『キリストにならいて』
の初の国字訳。

だと「プロス・トン・テオン」、これはどう考えても「神とともに」とは訳せない。ラテン語訳だと「アブド」という、「の家」とか「のもとで」という意味で、それはプロス・トン・テオンの意味にきちんと即しているんです。ところがルター訳でそれが mit になり、英語で with になり、そこから日本語の「ともに」が出ちゃったわけですよ。そういう、聖書翻訳史に関する無知という心配のなさが、現代の日本語訳をゆがめてると思いますね。

武村 きちんと訳せてるかどうかと、どういう口調で訳すかというのが、翻訳では常に問題になると思いますが、新共同訳が出たときに、あれは偽典や外典が載ってるからそれを読みたくて買ったんですけど、

「心貧しき者は幸いなるかな」というのが、なんだっけ、心の貧しい者は、「ああ、さいわいだ」ってなっていて、いいのかなあれでって思った記憶が(笑)。意味はそれでいいんでしょうけど。

土岐 そうなんですよ。いや、あの、原典との対照っていう点に關しても日本語という点に關しても、新共同訳は完全な失敗作ですね。例えばなんでしたっけ、ヨセフがマリアを、子供が生まれるまで「知らなかった」というところを、何て訳してたかな……

古澤 新共同訳ありますよここに。

土岐 ああ、はい。……ああ、「關係することはなかった」って訳してる(笑)。「男の子が生まれるまでマリアと關係することはなかった」。

古澤 もちろん事実的にはそういう意味ですけれどもね。

土岐 原典ではギーンノースコー、「知る」という言葉ですよ、それを、關係する、しなかった、って、なんか不倫な關係みたいな、へんなニュアンスが入ってきちゃいますよね(笑)。ヘブル語ではイヤード

って、まさに「知る」で、新共同訳もヘブル語から訳したアダムのところは「知る」と訳してるんですよ。マタイ福音書では「關係する」。そんなの訳しわけちゃいけませんよ。もともと新共同訳に「新」がついたのは、共同訳というのが最初出た、そのときはダイナミック・エクイヴァレンス理論というのに基づいて訳されたわけですが、動的等価理論でもいいでしょうか、ところが非常に評判が悪かったのでひっこめて、今度はフォーマル・コレスポンデンスって理論で書き換えたわけですね、ところがそれが一貫してないわけですよ、だから一方では「知る」と訳して、片っぽでは「關係する」と訳して。

武村 セブテュアギンタができたとき、七十人だか七十二人だかが手分けして訳したのに、みな訳し終わって付き合わせたら全員訳が一言一句たがわずすみずみまで一致していた、っていう伝説がありますね。土岐 そうそう、それとはもう雲泥の差ですね。新共同訳がそんなわけで悪い訳なので、もうひとつ出そうということになって、岩波から旧・新約聖書が出たんですけども、

これも、旧約はあまり確認してませんが、新約はやはり、使徒行伝なんか非常に誤訳が多いですね。

古澤 聖書は私家版の訳も多いですよ、塚本虎二とか篠藤訳とか。やはり聖書の翻訳に賭けるっていうことがあると思うんですけど、土岐さんとしてはどの翻訳が一番おすすめでしょうか。

土岐 やっぱり文語訳か口語訳か、または口語訳の改訂版である新改訳ですね、これはいいんじゃないかと思えますね。一九七〇年代かな、いのちのことは社、これはどちらかといえば保守的なファンダメンタルなプロテスタントのグループですが、口語訳を改訂するというそういう意味で新改訳この訳はばくもわりにいいんじゃないかと思えます。もとの口語訳はリヴァイズ・スタンダード・ヴァージョン(RSV)という、戦後すぐにアメリカで出たのを、アメリカの聖書協会から日本の聖書協会がもらって、それを参照して作られた。当時まだ発見されたばかりの死海写本のイザヤ書原典の特殊な読みなども、RSVが採用しているところは日本語訳もそのまま使ってるん

です。

武村 さっきのセプテュアギンタの「ディ
アスベイレイン」もそうですけど、原典の
どこにどういふ単語が何箇所出てきて、初
出がいつのどこであるとかそういうことを、
綿密に調べておられますよね。古典文献学
ではそれが基本なんでしょうけれど。

土岐 聖書には猫と熊が出てこないとかね
(笑)。

古澤 (笑) どうしてでしょうね、エジプ
トに猫いたんだしね。

武村 例えば今、英語の聖書だとオール電
子化されて、メシアならメシアという単語
を検索すれば一発で網羅的に出てくるん
でしょうけど、ヘブライ語やアラム語やギリ
シャ語だとどうなんですか？

土岐 それはインデックスがありますから。
例えばヘブライ語では、二〇世紀の半ば頃
にドイツのリソウスキーという学者が作っ
た、全部手書きの数百ページにわたるコン
コードクスがあるんです。日本語でも口語
訳聖書は索引があって、これは、ヘブライ
語とギリシャ語とアラム語の原典を全部併
記してあるんです。それをみれば日本語が

どのヘブライ語ギリシャ語アラム語に対応
してるかというのは一目瞭然にわかるよう
にできてる。ところが新共同訳のインデッ
クスはそうじゃないんですよ、ただコンピ
ュータ使って全部機械的に入力してつくっ
ちゃった、だからそのコンコードクスを使
って出てくるのは「知る」と「関係する」
とかねそういうまちまちな(笑)、全然役
に立たないんです。

古澤 土岐さんはずいぶん昔からコンピ
ュータ使っておられますよね、私なんかがま
だ触ってもいないころから。でもコンピ
ュータの作業と自分で一行一行読んでいく作
業とをきちんと使い分けておられる。

土岐 ほくは二〇世紀の人間が犯した最大
の愚行のふたつが原子力とコンピュータだ
と思って(笑)、あんまりコンピュータ
信用してないんですよ。口語訳聖書は手作
業でやって、それだけの対応をつけたコン
コードクスを作った、ところが新共同訳に
なってコンピュータ使ってもぜんぜん原典
との対応がない。コンピュータ使っても学
問的にはぜんぜん役に立たないものしかで
きない。



武村知子

武村 それはコンピュータの問題というよ
り使う人間の側の問題では(笑)。きちん
とした翻訳をもとにきちんと対応させれば
——
土岐 欧米英語圏ではそういうのあります
ね。

武村 なら別に愚行というわけでも——？
土岐 両面ありますよ(笑)、原子力発電
によってわれわれがこうやって電力の恩恵
うけてる面もありますよね。両面あります
よ、正反両面がね。まあともかく、これか
らの仕事としては新約聖書とセプテュアギ

ンタとのギリシヤ語日本語辞典というのを
まとめようと思ってるんです。

古澤 そうですか！ 新約聖書だけの辞典
ならともかく、セプテュアギンタまで入れ
ると膨大なものになるし、ぐっと範囲が広
がりますね。

土岐 十年か十五年くらいかかるでしょ
うね。退職後はそれに専念しようと思って。

「どちらでもない」こと。神の前の謙遜に
ついて

松永 例えば、ユダヤ教の終末論的な考え
かたと、仏教的な厭離穢土っていうのと、
どこが違うのかな。いまいるところは穢土
厭うべき世界であって、本来の世界は別の
ところにあるっていう考え方。

土岐 共通していますね。たぶん根本的に
は同じだと思います。

松永 仏教は死と生というかな、死の問題
が非常に大きなファクターとしてあります
よね。民族とか、ディアスポラにつながる
集団的アイデンティティの問題はあんまり
ないような気がするんだけど。

土岐 まあでも仏教もたればもとはイン
ドヨーロッパ民族ですよ、キリスト教は
生まれはパレスティナだけど育ちはインド
ヨーロッパ。話はまたぜんぜん飛躍しま

けれど、地中海をはさんでインドヨーロッ
パ語族とセム語族がいて、ヘブライ語には、
テンス、時制っていうのは「パーフェクト
(完了)」と「インパーフェクト(未完了/
継続)」しかないんですね。ギリシヤ語に

はさらに他に、完了でも未完了でもない、
どちらでもないという「アオリスト」って
いうテンスがある。だけでもとをたどれ
ば結局ものとすべてパーフェクトかイン
パーフェクトで見てるわけですよ。そうい

う点、地中海をはさんでインドヨーロッパ
語族とセム語族が共通のルーツにさかのぼ
る。ところが、ギリシヤ語では、どちらで
もないものが出てきた。

武村 「どちらでもない」ってどんなもん
です？

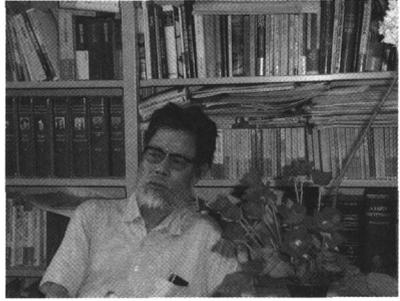
土岐 どんなもんですかね(笑)。「ニュー
トラル」ってのもそうですけどね、どちら
でもない、ラテン語でネウテラルというの
は、「どちらでもない」という意味ですね。

武村 そうか、時制に限らず、「どちらで
もない」という観念そのものが――

土岐 ええ、ギリシヤでは出てきてるわけ
です。

武村 でインドではゼロが発見された
(笑)。実際確かに、例えばドイツ語でも、
結局全ての時制はパーフェクトとインパー
フェクトに回収されてしまう気がする。ア
オリストというのは、例えばどういうこと
を表現するときに使われるんでしょうか？
古澤 パーフェクトとインパーフェクトの
違いは、つまり、あることが終わってるか、
続いているかの違いですよ、でも、どちら
でもない、終わってるとも続いているともい
えなくて、そもそもそのことが起こるかど
うかもわからないようなこと、例えばこと
わざとか普遍的なこととか。パーフェクト
とインパーフェクトはどちらもある意味で
現実のできごとと結びついている、でも、
現実が起こるかどうかもそもそも関係のな
い一般的なことからありますよね。

武村 予言というのはどうなんでしょう？
土岐 予言は、予言的インパーフェクトと
いうのがありましてね、将来実現するであ



ろうことをインバーフェクトで言ってるのねへブライ語では。

古澤 そういえば中国語にはテンスがないんですよ？

松永 中国語は陰と陽だから(笑)。

武村(笑) そういう問題なんですか？
ほんとはなんにもないの？ テンス。

松永 アスペクトはありますよ。テンスらしいものもないことはない。でも、起こったことが一年前でも来年でも、表現する言語形式は変わらない。時間は、時間を示す語句のところであらわすんで、それに対応

する言語形式があるわけではないんですよ。

武村 それで聖書訳すとどうなるんでしょう。例えば神が「光あれ」と言われた、というの、ギリシャ語だと？

土岐 アオリストですね。

武村 あ、どっちでもない。

古澤 なるほど、神の創造はアオリストで表現するんですね。

武村 ルターのドイツ語は過去形で訳してて、当然のように日本語も過去形で「神は言われた」と訳してますけど、それは厳密には間違い？

土岐 間違いともいえないけれど、必ずしも正確じゃないとはいえますね。

武村 ジャむしろ、テンスらしいテンスのない中国語で訳すと、それがいちばん正確かもしれないですね？ ああそうか、まさに「神いわく、光あれ」みたいなことになるわけかな。

古澤 このごろのブームなんかいかがですか、『ユダの秘密』とか、評判になっていきますね。

土岐 あれはぼくの一弟子で。たてつづ

けに翻訳を二冊出しましたね。

武村 七〇年代くらいのお若いころのご著作で、共著してらっしゃる土岐正策さんというかたは？

土岐 兄です。

武村 同じ分野を？

土岐 古代ラテン神父が専門ですね。一緒に翻訳したり本を書いたりして、共同で作業することが多かったんですが、こっちがラテン語がわからないときは兄にきいて、むこうがギリシャ語がわからないときはこっちにきいてという。それから、手紙はお互いにラテン語で書きあった。

一同 おお！

土岐 十年前になくなりました。

武村 ご兄弟はお二人？

土岐 姉がいます。プロのバイبولガン弾きです。

松永 あの、どういうご家庭だったんですか(笑)？

土岐 父親はいなかの牧師ですよ、プロテスタントのね。だからちょっとニーチェとの親近性を感じるところがあります。

古澤 ニーチェもそうですよね、親が牧師

で、自分は古典学をやつて。でも土岐さんはニーチェのようなニヒリズムには陥らずに――

土岐 陥らずに、かろうじて(笑)。

松永 お父様は明治生まれですか。どこで入信なさったの。

土岐 名古屋ですな。

武村 プロテスタントの信徒としてこういう研究なさつてるといじめられませんか？土岐 ないといえませんが(笑)。大学紛争のときは全共闘側に加担したんで、やっぱりその傷跡はいまだに癒えてないですな。

古澤 周囲からの批判をあびた？

土岐 主流派からは異端視されることになるわけです。大阪万博がありましたね、あのとき、そこへ日本キリスト教団も出館を決めたわけです、それに対して全共闘が反対した。すると東京神学大学の教授会は全共闘を弾圧したんだけど、そのときの論理ってのは、彼ら(全共闘)は行為義認主義者であり律法主義者だつていうそういう。全共闘の側は、アジア侵略のひとつの象徴、拠点としての万博に教団が出品するのは問題だということを提起したわけです

が。

武村 そしたらバリサイ人だつて？

古澤 全共闘的なお題目を唱えてるってことなんじゃない？ 教条主義的な。

武村 はあ、なるほど。

土岐 (笑) そういうメンタリテイこそが新約聖書の、いわば負の遺産をひきついで考え方なわけですよ。ほくの研究はそれに対して、当時のユダヤ教はそうではないんだ、いかに違うのかということを文献学的に立証するという、そこにほくの研究のひとつの原点があるわけです。

松永 神学大の全共闘ってどんななの？

セクトみたいなものの影響力は？

土岐 当初はあつたみたいだけど中盤以降はないですね。

松永 全員キリスト者として？

土岐 そうそう。学生の過半数を占めてました。

松永 そういう人たちは今でもキリスト者としてやってるんですか？

土岐 やつてる人もいれば脱落した人もいますね、それから、自殺者が多いですね。

武村 ことが宗教的心情とむすびついている

と、何か失望したときのショックが――

土岐 ええ、衝撃が大きいですね。ほくが神学校をやめるときに同級生から、おまえは信仰を捨てる者かって罵詈雑言されましたからね。神の召命に従つて神学校に入ったはずなのに、それを無断でやめて東大に移るっていうのは、神の召命を捨てる、信仰を捨てるに等しい行為だと。

武村 それに対して、それでも地球は回っている、と？

土岐 そうそう(笑)、doch bewegt sich die Erdeですな。

武村 そして東大へ移られて、めぐりめぐつて言社研に。学生が土岐さんのもとにきて学ぼうというときに、何をどのように教えたかとお考えですか？

土岐 難しい問題ですな。

古澤 土岐さんのご研究はほんとに正確を重んじられるというか、それこそ一文字一文字、違いをおろそかにせず、まことの意味での文献学をなさつてると思うんですね、でも一方、それは砂をかむような作業だという面もありませんかしらね。なんか、研究分野としても荒野を選ばれたような。

でもそこで得る喜びというのはどんなものなんでしょうか。

土岐 それはもう大きいですね。

古澤 具体的にどんなときに喜びを感じられるの。

土岐 それは発見の喜びですね。

古澤 あれもこれも何十冊も調べて、対照して辞書をひき文章を読み論文を読みという、それがなければ得られなかった発見の？ その発見の最も大きな喜びは、ある特定の時代を知るとかそういうことではないもつと別のところにあるんですね。

土岐 つきつめていえば、聖書というもののメッセージはどこにあるのかということですね。当然古代にもかわるけれども現代にもかわらざるをえない。聖書のメッセージが我々に何を伝えているかということですね。

武村 何を伝えているんですか？

土岐 (笑) ちょっと問題が大きいですが、ひとことといえば、神の前における謙遜ということですね。

武村 現にご研究をなさってる土岐さんに對してもそういうことを聖書は――

土岐 語ってますね。

武村 いろんな時代の文献がぎっしり詰まった秘境の荒野みたいな研究室でひとつひとつ単語を拾ったりする営みは、土岐さんにとっては神の前での謙遜の営みということになるんでしょうか。

土岐 そのひとつのかたちということになりますね。

武村 そういう発見の喜びは一方で憤りと怒りの営みでもあるんじゃないでしょうか。イザヤとかエレミヤとか結構よく怒りますけれどもね、あっこうだったんだ、なのに二千年ものあいだ誰もこれを知らずに聖書を読んでいたんだっていう。

土岐 ありますねそれは。

武村 それは謙遜の営みとしてはどうなんですか？

土岐 (笑) 喜びとやらはらにそういう面は確かにあるし、それも一種の、神の前の謙遜のひとつの営みの結果じゃないでしょうか。

武村 結果なんですか、それは、プロセスではなく？

土岐 それは難しい問題ですね。両面あり

ますね。

武村 ……さきほどの質問になりますけど、大学にいて、学生に何か、研究を通じて伝えたい、伝わるだろう、伝わりつつある――それはアオリスト形式でもいいんですけど、伝わるとすれば何が伝わるんでしょうか。

土岐 繰り返しになりますが、ひとことといえば神の前での謙遜ということですよ。武村 つまるところ学問という営み全般において？ それでも、ひとりであるのと大学でやるのとは、同じだけど違うものがあるでしょう。大学という場において教えるがら、その中の謙遜とは？

土岐 難しいですね。

武村 手強いんですね(笑)。学問で、なんでしょうね。

土岐 なんでしょうね(笑)。

(二〇〇七年七月)